

勝呂・肛門科

内科・外科・皮膚科(大腸検診)

阪神西宮駅東口スグ
☎0798-22-1567

阪 神

三田

支局長 からの手紙

尼崎市の医師、長尾和宏さん

(62)は、1995年の阪神大震災を機に大病院での勤務を辞め、「町医者」となって在宅医療の道に。これまでに約2500人の患者をみとりました。多くの著作でも知られています。

長尾さんの著書2冊を原作にした「痛くない死に方」と、ご本人を追ったドキュメンタリー「けったいな町医者」という映画2作品が2月下旬から全国で順次公開されます。4日、大阪市内であった完成披露試写会で見てきました。

「痛くない…」(高橋伴明監督)は、柄本佑さん演じる若手在宅医師の河田が、在宅医療の厳しさに直面しながら患者と家族に向き合い、成長する物語。長尾さんがモデルである河田の先輩医師を奥田瑛二さんが演じ、余貴美子さんが

宇崎竜童さんらが脇を固めます。「けっさい…」(毛利安孝監督)は、長尾さんがクリニックで診察する様子や、在宅医として街を飛び回る日々を追っています。

患者とのやりとりは尼崎らしい人情にあふれています。大病院の入院措置や投薬など現代医療の問題点にも言及。長尾さんが男性患者をみとる場面で終わり、じんわりした温かみが心に残ります。

2作品とも大笑いし、いつの間にか涙もぼろぼろ。そして心をかき乱されました。私の母方の祖父は、本人の強い希望で最晩年に退院し、自宅で最期を迎えました。その時はよかったと感じたものの、実家に戻り介護を一人で担った母親の苦勞を思うと複雑な感情を隠せません。一方、父方の祖母は「延命治療はしないで」と同居する叔父らに話していたそうですが、最晩年は一年以上、「胃ろう」を続けました。私は叔

父の苦役の決断を理解しつつ、意識なき祖母を目にするのがつらくて見舞いを避けるように。映画は、考えることから逃避してきた我が身の情けなさを突きつけてきました。2作品を見た人は皆、身の回りや自身に訪れる「死」に思いを巡らせることでしょ

「尼崎の町医者」の映画

私が心をかき乱された理由はもう一つ。新型コロナウイルスです。「けっさい…」の撮影は2019年秋、20年1月で、ウイルスの影が忍び寄る直前。今は「密」を避ける難しさや在宅医療希望者の急増など、現場は厳しさを増しています。長尾さんの苦悩を想像せずにはいられません。

医療をめぐる課題はもとより山積しています。コロナによって変革は不可避。医療制度を含め「人間の尊厳ある生き方・死に方」を真剣に考えねば、と肝に銘じました。長尾さんもこの日の

舞台あいさつで「医療を変えたい」と訴えかけました。

県内では神戸国際松竹で2月26日から、尼崎・塚口サンサン劇場で3月5日から、「けっさい…」を皮切りに順次上映されます。

【阪神支局長・岸桂子】



「痛くない死に方」「けっさいな町医者」の完成披露試写会で写真撮影に成る医師の長尾和宏さん(左)と痛くない…の高橋伴明監督。大阪市浪速区で